

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	松枝 拓生
論文題目	「紋切り型との闘い」—ドゥルーズ思想における人間形成論		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本研究の目的は、ジル・ドゥルーズの思想に内的な人間形成論を明らかにし、その現代的意義を明らかにすることである。その際、ドゥルーズ思想の方法論と思想内容に通底する「紋切り型との闘い」という主題に着目した。ドゥルーズの思想は、「紋切り型との闘い」を通じて紋切り型に囚われた状態から逸脱しゆくプロセスを、人間形成のプロセスとして提示していることを明らかにした。</p> <p>本研究は序章、三部構成をとる七つの章、そして終章によって構成される。</p> <p>序章では、本研究における問題の所在について論じたあと、問題に応答するための方法論と先行研究に対する立ち位置を示し、最後に本研究の構成について論じている。</p> <p>第一部では、本研究が着目する二つの基本的な方向性が取り扱われる。すなわち、ドゥルーズ思想に通底する紋切り型に対する批判的関心の所在および、ドゥルーズの論じる「学習」概念がもつ紋切り型からの逸脱の志向である。</p> <p>第1章では、アラン・バディウらの先行研究におけるドゥルーズ像によって、ドゥルーズ思想における社会現実への関心が隠蔽されてきた事情が明らかにされる。分析を通じて明らかになったのは、ドゥルーズの対話批判が、彼の主観的な傲慢さの証ではなく、彼の紋切り型批判の観点に由来するものだけということである。知識人批判や、概念の創造にその使命を見いだす哲学観、そして教師から生徒への知識教授に対する批判的言及も、ドゥルーズ思想を貫く紋切り型批判という観点から読み解くことができる。</p> <p>第2章では、ドゥルーズ思想における人間形成論の基本構図が確認される。ドゥルーズ思想における「解釈」概念の変遷をたどると、ドゥルーズは一貫して、既成の秩序（紋切り型を生み出す構造）に依拠しそれらを追認するのではなく、既成の秩序から逸脱する働きを肯定的に論じている。このような立場は、「横断線」の概念においても確認できる。そして、『プルーストとシーニュ』において論じられる「学習」は、そうした逸脱のプロセスである。</p> <p>第二部では、第一部で論じた二つの基本的な方向性が、ドゥルーズの主著『差異と反復』で展開される「超越論的経験論」の方法と思想に結実したことが論じられる。</p> <p>第3章では、ドゥルーズ思想の方法論の特徴が検討される。カント批判を通じた</p>			

ドゥルーズの思想形成の経緯に、既存の思考様式（哲学史）との対決・乗り越えを哲学の営みの試金石とみなすドゥルーズの立場が伺える。

第4章においては、ドゥルーズの「愚かさ」概念を検討することで、ドゥルーズが『差異と反復』で論じる「実在的経験」が一種の成熟の契機に関わる概念であることが明らかにされる。思考に内的な構造である「愚かさ」に対して、恥辱という忌避的な感情を抱くことが、人間形成のプロセスとして見いだされる。

第三部では、ドゥルーズ芸術論が検討される。紋切り型に対する批判的立場をとるドゥルーズは、紋切り型の全面的な排除を志向するのか。この問いは、われわれが現実の生において実際に紋切り型と無縁の境地を構想しうるのかというアクチュアルな問題にかかわる。芸術の制作と受容は紋切り型表現と密接な領域であり、上記の問いに対するドゥルーズの立場もまた、その芸術論によく表明されている。

第5章では、画家フランシス・ベーコン論が扱われる。ベーコンは観衆や自らの中にある紋切り型にさまざまな手法によって抗うが、紋切り型と無縁な領域を構想できるとは考えない。「ダイアグラム」による紋切り型の局所的破壊を評価するドゥルーズもまた、紋切り型を人間にとっての不可避の条件と認めている。

第6章および第7章では、ドゥルーズの映画論が扱われる。第6章で扱われる「信の転換」という倫理的テーマは、それまで無自覚に前提としていた枠組みに対する不信（ニヒリズム）と、無自覚な前提の批判的自覚というプロセスを内包する。そこには、ニーチェの道徳的真理批判の思想を継承した人間形成論としての特徴が伴っている。また、第7章では第6章で示唆される「見ることの学習」という主題について、発展的に検討される。ドゥルーズは、紋切り型にまみれた我々の日常（「日常の凡庸さ」）を映し出す映画の機能を評価している。そこでは、第4章で論じた「愚かさ」概念の含意とも通底する、ドゥルーズ思想の人間形成論の諸特徴が改めて確認される。

終章では、ドゥルーズ思想に内的な人間形成論の特徴と現代的な意義が明らかにされる。要約すれば、ドゥルーズの思想は自己への「恥辱」の感覚を伴って喚起されるような、「脱欺瞞」の人間形成のプロセスを展望するものである。これは、紋切り型の「克服」を展望するものではないが、よりよい生き方の構想を諦めるニヒリズムでもない。ドゥルーズの思想は、人間の認識や思考が紋切り型を脱却できないことを見据えている。ドゥルーズの思想が示しているのは、だからこそ「紋切り型との闘い」が必要だということである。我々は自らが紋切り型に無自覚に囚われていることを直視し批判的に捉えることができる。ここに、ドゥルーズ思想における人間形成論としての射程を見いだすことができるだろう。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ(1925-1995)のポスト構造主義哲学が人間形成論としてもつ意義を明らかにした教育思想研究である。従来、教育思想研究において、機能主義的な教育言説、近代教育言説、オーソドックスな教育の語り方と対称的な異端的要素としてのみ扱われてきたドゥルーズ思想を、「紋切り型(cliché)との闘い」という動的な営みを軸に、広く人間形成に豊かな意義をもつものとして捉え直した点に特徴がある。紋切り型とは、外部から人間を制約し固定観念に縛り付ける社会通念や表象的な思考様式であると同時に、心的に内部から人を囚われの状態に縛り付けるものでもある。この紋切り型を逃れられない人間の条件として引き受けつつも、思考の不可能性、自らの能力を超えたものとの出会い、むき出しの世界との邂逅といった超越経験を通じて囚われからの解放にいたるのがドゥルーズの超越論的経験論である。そして強度と出会う経験の衝撃によって表象の体制が破綻し、愚かさの関係が実現するプロセスにこそ、個体全体を貫く修煉あるいはパイディア(教育学)としての意義が見いだされる。そこから人間が世界と相互交渉するなかで、よりよさを追求しながら自らの生を変容させてゆく漸進的なプロセスとしての人間形成論が描き出された。紋切り型との闘いの吟味においては、フランス語、英語、日本語によるドゥルーズの原典の緻密な読解をもとに、カントの超越論的哲学との対峙、フランシス・ベーコンの絵画論、映画論などを通じて難解なドゥルーズの思想の意義を多角的に豊かに描き出した。とりわけ、芸術の媒体を通じて、「見ることができるようになる」学習が導き出された点、および、自己耽溺的ではなく社会批判、政治批判のメディアとしての芸術の機能が解明された点は本論文の際だった特徴であると言える。試問において松枝氏は、これらの筋を明瞭に論理的に提示し、批判に対しては謙虚に受け止めつつ弁論し、質疑応答に適切に応じることができた。

本論文の優れた点、オリジナルな点は以下の通りである。第一に、これまでの先行研究では着目されることがなかった、紋切り型への囚われとそこからの解放という視座からドゥルーズの思想全体の意義を明らかにした点である。第二は、エリート主義、耽美主義的、非政治的思想家、社会的現実に関心ない思想家としてみなされてきたドゥルーズの思想を、社会的関心と政治的問題関心に開かれつなされた実践哲学としてとらえ直した点である。第三は、哲学的な視座として、共通感覚や普遍的な「一」を前提とせず、かといって相対主義やニヒリズム、諦めにも陥らないきわどい第三の道、包摂しない全体性を哲学の思考経路として描き出した点、および、受動的であると同時に能動的でもある世界への関わりを描き出した点である。第四は、従来、肯定の思想として捉えられてきたドゥルーズの思想に隠され

た、恥辱、不信、愚かさ、苛立ちといった人間のネガティビティに関わる側面を引き出し、否定をくぐり抜けた果てによりよき生を肯定し希求する思想として、その現代的意義を解明した点である。この最後の点こそが「脱欺瞞の人間形成論」に関わると同時に、人間変容に通じる臨床教育学的な意義をもつものとして評価される。以上のようにして導き出されたドゥルーズの思想は、意図的な他者からの働きかけとしての教育というよりもむしろ、自己の解体と再生、世界をありのままに見られるようになることとしての学習、そして何よりも自己教育としての人間形成論の新たな形を提示するものとして高く評価される。

試問においては、本論文についてのいくつかの問題点・弱点も指摘された。第一に、紋切り型とは何か、それがどこか固定されたものとして前提になっていないかという点が問われた。第二に、紋切り型からの解放の契機が受容性にあるとするならば、囚われにある人間はただ待つしかないのか、そこに能動的な働きかけの契機はないのか、さらには紋切り型を超えるためにこそ型へのイニシエーションは必要なのか、といった問題提起がなされた。第三に、陶冶を含む「人間形成論」という切り口は、ドゥルーズの思想が批判しようとしたパッケージ化を逆にもたらしはしないか、ドゥルーズの思想は従来の人間形成論という射程にとどまりきらないのではないかという懸念も表明された。これらの懸念は、松枝氏自身が従来の教育に対する紋切り型への囚われから十分に脱し切れていないことを示唆するものであったと言える。第四に、選び取る信によってよりよき生を人が希求できるようになるという捉え方にはナイーブな人間観があるのではないかという批判的視座も提起された。第五に、ドゥルーズの思想を非政治的であるという批判に対して弁護するという当初の目論見にもかかわらず、松枝氏自身がどこまでドゥルーズの代替的政治性をポジティブに提示することができたのかという疑問も提起された。しかしこれらの批判は、ドゥルーズの思想のもつダイナミズムや反二元論的思考、従来の思想枠組みを逸脱する生の過剰さをいかに言語化するかというさらなる挑戦を課し、今後の研究の課題として取り組まれるものであり、本研究の学位論文としての価値をいささかも減ずるものではないと判断された。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和4年2月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降